

2018 第4回 これからの建築士賞

「建築士」は日本の都市と建築にかかわる重要な職能資格であり、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注者など幅広い業務に携わりながら、未来につながる社会の実現のため努力してきました。近年では防災、環境、高齢化と人口減少、歴史文化の喪失など多くの課題の中で、その専門的な知見を生かしながら、魅力的な社会、街並み、建築空間の実現を目指して活動しています。

なかでも最近では他の建築関係の会とも連携し、それぞれの地域をベースにした協働も盛んになってきており、これらの新たな活動が大きな波となって地域社会の未来に力となる事も期待されています。多様な分野における建築士ならではの新しい動きに光を当て、顕彰し、支援するとともに広く世の中に伝えようとするのが「これからの建築士賞」の目的です。

募集要項

1. 賞の対象

都市と建築に関わる近年の活動や業績で、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注など建築士としての多様な立場を通じて行った未来につながる社会貢献に対して、その活動・業績を担った建築士もしくはそのグループを顕彰する。

未来につながる社会貢献とは、たとえば、美しい景観の形成、安全で魅力的なまちづくりや空間の提案、自然環境や歴史的環境の保全、地球温暖化・人口減少・高齢化社会に対する提案、弱者に対する対策、文化・にぎわい・コミュニティの創出、建築に関する啓蒙・普及など多様であるが、さらに、これからの建築士の仕事を開拓するような、従来の建築士の枠を拡げる活動の応募も大いに期待したい。

2. 名称及び受賞数

これからの建築士賞 10点程度(但し、応募点数による)

3. 応募資格

原則として建築士もしくは建築士を含むグループで、活動のベースが東京にあること。過去の応募者の再応募は可とします。審査員が直接係った案件は応募対象から除外される。また審査員が所属する事務所、グループが審査対象となる場合は、その案件に係る一切の審査から外れるものとする。

4. 応募方法

別紙候補推薦書に記入の上、必要に応じて参考資料をA4用紙3枚以内にまとめて、事務局まで提出のこと。関係資料は返却されないものとする。郵送、メールによるデータの送付も可能。候補推薦書は東京建築士会ホームページからダウンロード可能。自薦、他薦を問わない。

5. 審査員

遠藤 幹子 (office mikiko / 一般社団法人マザー・アーキテクチャ)
小野田 泰明 (東北大学大学院工学研究科教授)
馬場 正尊 (オープン・エー / 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科教授)
藤原 徹平 (フジワラテッペアーキテクツラボ / NPO 法人ドリフターズインターナショナル / 横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授)

6. 審査・顕彰

3月上旬 公告
4月27日 応募書類提出締切
5月中旬 一次審査会(必要に応じてヒアリング実地審査)
5月下旬 最終審査会
6月7日 東京建築士会総会の席上で顕彰

7. 発表・その他

受賞者の活動パネルを上記総会時に展示(パネルはA2版、受賞者が作成するが、場合によっては推薦者が協力する)
受賞者及びその活動については本会会誌、ホームページに講評とともに掲載するほか、各メディアに公表予定。

8. 応募締切

2018年4月27日(金)必着
事務局窓口へ直接お持込みいただく場合は、4月27日(金)17:00迄とする。

9. 応募書類提出先・お問合せ先

一般社団法人 東京建築士会 これからの建築士賞係
〒104-6204 東京都中央区晴海1-8-12 オフィスタワーZ 棟4F
TEL:03-3536-7711 FAX:03-3536-7712
E-Mail: event02@tokyokenchikushikai.or.jp
http://www.tokyokenchikushikai.or.jp/

審査結果

入賞6点(応募点数22点)

1	業績名 クリエイティブ・リソース 資源循環のための素材開発と環境建築への取り組み	4	業績名 マチエールからマチヅクリまで 一都市ストックの活用を軸にした設計活動
候補者名 ASEI建築設計事務所 鈴木 亜生		候補者名 G ARCHITECTS STUDIO 田中 亮平	
2	業績名 家具塾	5	業績名 こども園の中は“せっけいじむしょ”
候補者名 宮本 茂紀、藤江 和子、安東 陽子、飯田 彩、田井 幹夫、 野崎 みどり、藤森 泰司		候補者名 小室下司建築設計事務所 小室 匡示、下司 歩	
3	業績名 「白樺湖夏の家」の保存と継承	6	業績名 断熱タイニーハウスプロジェクト
候補者名 建築を保存する会 南迫 哲也、北澤 興一、谷口 宗彦、田野遼 幸裕、河野 工、柴田 卓次、関根 久雄、石川 啓司、 小俣 光一、森田 達志、鈴木 敏彦、香川 浩、平井 充、関谷 重彦、後藤 治、武藤 かおり		候補者名 断熱タイニー学生チーム / 沼田 汐里(千葉大学修士2018卒)、森本 天希(千葉大学工学部4年) HandiHouse project / 中田 裕一、中田 理恵	

審査報告

4回目の今回、応募数は22と決して多いとは言えませんが、今までにない建築士の活躍の可能性も含まれていて、最終的に6つの取り組みをこれからの建築士賞に選定しました。一次審査で全ての提案について一つずつ審査し、一人以上の審査員が推す14の提案を最終審査の対象とし、更に個々に議論を深めていきました。構造材・建材の地産地消とも言えるべき鈴木亜生さん(ASEI建築設計事務所)の取り組み、家具モデラーの宮本茂紀さんと家具デザイナーの藤江和子さんを中心としたものづくりの原点を未来に繋げていく場としての家具塾の皆さんの取り組み、同窓会的組織による工学院大学で教員を務めた建築家故武藤章設計の山荘を動態保存する取り組み、は審査の早い段階から審査員ほぼ全員一致で受賞が確定しました。一方で、インテリアからまちづくりまでのさまざまなスケールにおいて建築的熱量を投入し続ける田中亮平さん、こども園の中に設計事務所をつくりアーティストも巻き込んでアップデートを続ける小室さん下司さんのお二人、省エネルギーの社会的問題の解決を建築最小単位と

も言える小屋のセルフビルドを通じて実践する学生と建築士による断熱タイニーチームの取り組みについては、もう少し展開を見てから判断しても良いのではという意見の一方で、受賞することでその活動が見える化するなどし、彼女らを支援していくことになるのではないかという意見があり、今回受賞を果たしました。東京建築士会は、この賞を権威的な賞としてスタートさせたわけではなく、先が見えにくくなっているこれからの建築士の活躍の可能性を広く議論し、共有していく場・メディアとしてありたいと考えています。今年から審査員に加わっていただいた小野田さん、馬場さんも交えた審査では「これからの建築士の役割とはなんぞや」という問い掛けが頻繁になされ、その内容については各審査員にまとめていただき、更には、実際の活動を見学して、シンポジウムを開いてはどうかという提案も出されました。建築士の活躍の可能性を広げていくメディアとして、そのような提案にも積極的に応えていきたいと考えています。

事業委員会委員長 佐々木 龍郎

関連情報：話題の書籍

これからの建築士 —職能を拡げる 17の取り組み

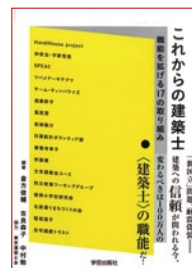
建築への信頼が問われる今、変わるべきは100万人の＜建築士＞の職能だ！

第1回これからの建築士賞審査結果を紹介した『これからの建築士—職能を拡げる 17の取り組み』(編著：倉方俊輔、吉良森子、中村勉 協力：東京建築士会)が出版されました。この賞の内容が詳しく掲載されています。

全国の書店・ネット書店で販売

本体価格2,300円＋税
発行：学芸出版社

<http://www.gakugei-pub.jp/>



資源循環のための素材開発と環境建築への取り組み

藤原 徹平

[illegible]

2 家具塾

日本を代表する家具デザイナーと伝説の家具モデラーを中心に、実力派の家具デザイナーやテキスタイルデザイナー、建築家が事務局となって、2〜3ヵ月に一回開かれてきた勉強会である。長く続けられているとはいえ、有志の集まりである家具勉強会が、「これからの建築士賞」に推されたのは、この活動が、現代社会が建築士に求めている重要なポイントに触れているからだ。第一には、人と空間をつなぐ存在である家具に起点を定めることで、両者の関係に具体的かつ包括的に肉薄している点である。過酷な現代社会、人々が安心できる場所はどんどん失われているが、実際に人の体に触れる家具には、こうした非人間的状況を調停する力がある。実践的にそこに介入する経験は、空間と人を繋ぐ専門家としての原点を確認する行為そのもの

でもある。第二には、作るという人間の活動を手の所作から生産論まで幅広いレンジで探求しようとしている点である。近年の家具生産を取り巻く状況には難しいものがあるが、根本からそれを問うことで、建設産業全体に拡張可能な問題としてそれを理解することが出来ている。第三には、家具を構成する素材そのものに着目して、それをしつこいまでに掘り下げている点である。木材、ガラスというだけでなく、皮革、漆、塗料など、人が触れる界面それ自体を構成するモノの実態に豊かな解像度で切り込んでいるプログラムは秀逸である。

この稀有な活動が、これからもより深く、また、より広がりを見せて続いていくことを、強く期待したい。

小野田 泰明

家具塾：ものづくりの原点を伝承する、共に考える場

メンバー
スーパーバイザー
宮本茂紀(モデラー/ミナミウ)
塾長
藤江和子(家具デザイナー/藤江和子アトリエ)
サポーター
安部雄子(テキスタイルデザイナー/安部雄子アトリエ)
知田真(建築家/デザインコミュニケーター)
田村静夫(建築士/アーキテクツカフェ/田村静夫建築設計事務所)
藤原香代(家具デザイナー/藤原香代アトリエ)
野崎みどり(家具デザイナー/藤江和子アトリエ)

趣旨
家具塾は、ものづくりと身体性の原点に立ち戻り、人(職人やデザイナー)、もの(家具や製作過程の実感)、空間(国内外の建築空間)を実際に見て、触れながらものづくりのあり方を学ぶ場です。家具デザイナーの藤江和子と家具モデラー・ミナミウ代表の宮本茂紀をはじめ、家具デザイナー、テキスタイルデザイナー、建築家、職業者からなる主催メンバー(家具塾)が企画・運営し、2〜3ヵ月に一度開催しています。毎回、デザイナー、職人、建築家など、分野を超えた幅広い参加者が集い、多角的な議論を深めています。2014年に始動し、2018年4月で第16回を迎えました。

主旨
近年のIT化、情報機器のモバイル化などとともに、建築空間に深く関与する家具をデザインし、実現することが難しくなっています。しかし、建築と家具が相乗的に生み出す空間の重要さを建築家やデザイナーが改めて認識することで、新たな可能性も開き込めるのではないでしょう。同時に、家具を製作する現場では、社会経済の影響を受けやすく、職人生活体制も維持することが大変難しい状況にあります。永く育まれてきた日本独自の技術や、工芸や試行錯誤を重ねて新しいものを生み出すつくりの意匠や感性の継承が難しくなっています。今後の日本のものづくりにおいて、現場の質の高さを保ち、新たな試みに挑戦する環境を整えていくことも大きな課題です。家具塾では、さまざまな技術や経験を参加者で共有するだけでなく、全ての回を記録しアーカイブし、家具塾ジャーナルとして毎回の概要を発信することで、業界内外の多くの人々に情報発信、問題提起を行っています。

プロローグ・チーム
第1回 『家具塾始動』
2014年 3月29日
「デザイン一日報告」

第2回 『ものにつくりだす 家具が空間を変えるとき』
2014年 5月31日
「宮本茂紀の仕事」
「藤江和子の仕事」

第3回 『ものにつくりだす 空間に表情を与えるテキスタイル』
2014年 7月26日
「安部雄子の仕事」
「知田真とのコラボレーション」 野崎みどり

第4回 『家具づくりの現場から』
2014年 9月27日
「知田真の仕事」
「プロダクトと特注 着地点の定め方」 藤原香代

第5回 『家具づくりの現場から』
2014年 12月6日
「二嶋茂生 流行中の家具製作」 宮本茂紀

第6回 『建築家とものづくりの距離』
2015年 4月4日
「アーキテクツカフェ」の作り方 田村静夫
「3人の建築家のものづくりへのまなざし」 長岡健、六角美穂、田村静夫

特別編 『みんなの森ぎょうメディアコスモス見学会』
2015年 7月5日
案内 野崎みどり
協力 伊東建築設計事務所

第7回 『建築とともに考える家具』
2015年 8月8日
「藤江和子と考える家具」 藤江和子、安部雄子
「家具づくりの現場から」 宮本茂紀

シリーズ・チーム
第8回 『素材から見るものづくりシリーズ1(木)』
2015年 12月26日
「様々な経験を語る 宮本茂紀 実例から見る木素材のデザイン・構造・検査」 宮本茂紀

第9回 『つくり方から考える家具シリーズ1(組手)』
2016年 2月20日
「建築の組手」 深谷基弘
「職人の組手」 宮本茂紀

特別編 『台湾大学社会科学部図書、台中国家歌劇院見学会』
2016年 5月13,14日
案内 藤江和子、野崎みどり
協力 伊東建築設計事務所

第10回 『宮本茂紀の職人談義1(戸沢忠蔵氏)』
2016年 7月23日
「家具職人談義『台湾見学ツアー』の報告」 藤江和子、野崎みどり
「戸沢忠蔵の家具づくり」 戸沢忠蔵 × 宮本茂紀 × 藤江和子

第11回 『つくり方から考える家具シリーズ2(木材塗料)』
2016年 11月19日
「建築の基礎、特殊な塗装、塗装実演」 島田真一郎

第12回 『宮本茂紀の職人談義2(若手家具製作者たち)』
2017年 3月11日
「若手家具製作者の仕事」 後藤洋佑、佐藤健、佐藤祥
「先輩、宮本さんへのインタビュー」

第13回 『素材から見るものづくりシリーズ2(漆)』
2017年 6月24日
「素材と構造、漆田実演 × 土岐謙次のものづくり」
「金田さん × 土岐さん × 宮本さん実演」

第14回 『つくり方から考える家具シリーズ3(Knoll)』
2017年 9月30日
「KnollのデザインとKnoll」 中田尚樹
「日本のプロダクトについて」 宮本茂紀

第15回 『素材から見るものづくりシリーズ3(皮革)』
2017年 12月9日
「家具の歴史について、絶対に知っておくべきこと」 川北秀弘
「革製椅子の歴史と椅子作り」 実演 宮本茂紀

第16回 『素材から見るものづくりシリーズ4(ガラス)』
2017年 4月14日
「三保浩子椅子の創造力」 三保浩子

家具塾メンバー
宮本茂紀(モデラー/ミナミウ)
藤江和子(家具デザイナー/藤江和子アトリエ)
安部雄子(テキスタイルデザイナー/安部雄子アトリエ)
知田真(建築家/デザインコミュニケーター)
田村静夫(建築士/アーキテクツカフェ/田村静夫建築設計事務所)
藤原香代(家具デザイナー/藤原香代アトリエ)
野崎みどり(家具デザイナー/藤江和子アトリエ)

3

さらには、同窓生有志が、活動の主体になったことにも賛意を送りたい。共に建築を学んだ建築人同士が、重要な社会資本を保全するためにゆるやかに連携しながら、困難を乗り越えて目的を達成したという事実は、21世紀の世界で注目されている「マルチステークホルダー」の時代を先取りした活動と言える。冷徹なグローバル経済に晒される一方で、創造性をリスペクトしない付度マインドが蔓延する現代の日本で、多様性や豊饒性を取り戻すには、こうした主体が社会に積極的にプラグインしていくことが欠かせない。

全国に多くある建築学科の同窓会/同窓生が、重要なステークホルダーになり得るということを示した示唆に富んだ活動であり、プロトコルとしての拡張性は高く評価できる。

小野田 泰明

建築を保存する会

南迫哲也、北澤興一、谷口宗彦、田野邊幸裕
河野 工、柴田卓次、関根久雄、石川啓司、
小俣光一、森田達志、鈴木敏彦、香川 浩
平井 充、関谷重彦、後藤 治、武藤かおり



Photo : Sadamu Saito

長野県茅野市白樺湖畔にある工学院大学白樺湖学寮は、昭和30年代から運用されてきたが、2015年度をもって廃止・解体の方針が示された。これに反対し、存続を訴えるために工学院大学の卒業生を中心に組織されたのが「建寮を保存する会」である。

この学舎は、学生と地元住民との交流をきっかけとして造られた小さな小屋から始まり、歴代の建築学科教員（天野太郎、武藤章、南迫哲也）による設計で増築がなされ、最終的には武藤・南迫のプランでまとめられている。学生たちの思い出というだけでなく、工学院大学建築学科の歴史そのものであり、特に職中に早逝した武藤章の建築として貴重なもので、第50年の文化財となり得る建築である。

学校法人との交渉の結果、工学院大校友会・建築系同窓会に施設を譲渡し、運営は「建築を保存する会」が担当することになり、会の体力に見合った規模（武蔵による一期工事、1968年）に減築し、別荘「白柳湖夏の家」として再出発した。改修および備品工事は会員の出資による。2017年春より運用を開始。

日本人で唯一アルヴァ・アールトに師事し、北欧建築の紹介者として知られる武暮章の建築と思想を継承するため、新規の家具備品は全てアールトがデザインしたものとした。また、定期的に北欧をテーマとするイベントを開催し、新たな学びの場として活用している。

この活動は、ひとつの建築の動態保存であり、設計者と教えずたちとのコミュニケーションである。



アルヴァ・アールト（左）と武蔵野



武藤章（むとう あきら）

1931年 東京に生まれ
1954年 東京大学工学部建築学科卒業
1956年 工学院大学天野太郎研究室助手
1959年 工学院大学建築学科専任講師
1959-1961年 アリエ、アルヴァ・アールト
1961-1962年 アリエ、ジノ・ヴァッレ
1963年 武蔵野研究室一般建築土事務所設立
1964年 工学院大学助教授
1974年 工学院大学教授
1985年 退任



5 こども園の中は“せっけいじむしょ”

こども園の中に事務所を構え、「居ながら設計」をされている小室さんと下司さん。お若いながら、積極的に事業主との「太く、長く、腰をすえた」関係を深め、単なる設計の枠にとどまらない活動をされていることを頼もしく思いました。

日本の都市部における保育課題はまだたくさんあり、のびのびした社会の担い手を育てるには、もっと豊かな子育て環境を作らねばなりません。待機児童の解消、園庭など十分な遊び場の確保、人材不足の中でのオペレーションの工夫、在宅保育児や障がい児など多様なニーズに応えるサービスの提供、近隣の不理解やクレームへの対策、人口減少後の既存施設の活用方法、などなど。これらは一事業者だけではなかなか解ききれない問題で、行政や設計者、他の保育事業者らと連携してお互

いの過不足を補いながら、近隣や保護者も巻き込んで、地域全体で保育の質を向上することが今求められています。

小室さんと下司さんの活動は、このように一つの園、一つの地域に入り込んでじっくり関係を育むことで、こういった社会課題を無意識ながら、一つ一つ紐解いておられるのだと思います。

彼らの活動が、これまでのどのような地域、どのような子どもたちを育ててきたのか？ 今後どのように地域の保育の質を豊かにしてゆけそうなのか？ 日本の子育て環境をどうにかしたいと思う身としては、とても気になります。実際に伺って、お二人や事業主さんと議論してみたいと思います。

遠藤 幹子



